

多民族共生社会における中国系同郷組織とアイデンティティ

—トリニダードの中国系市民に関する一考察—

Chinese associations and identity construction in a multi-ethnic symbiotic society

—The Chinese in Trinidad: a preliminary report—

伊藤 みちる¹

¹大妻女子大学国際センター

Michiru Ito¹

¹International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：トリニダード，アイデンティティ，中国系，多民族共生社会

Key words : Trinidad, Identity, Chinese, Multi-ethnic symbiotic society

抄録

本稿は、ヨーロッパ列強の植民地開発の結果、多民族共生社会が展開されるようになったカリブ海諸島最南端のトリニダード島における、中国からの移住者やその子孫のアイデンティティ構築過程を探るものである。19世紀前半から主に労働者としてトリニダードへ組織的に移住した中国人移民は、20世紀初頭には社会的階層の上位を占めるようになり、カリブ海地域と東アジア、そして当時の宗主国である英国の各地で経済的・政治的に活躍し、中華民国の国民政府において外相を務めた者も輩出した。20世紀半ばより中国系に対して中国出身者としての帰属意識を促してきた多数の中国系同郷組織は、現代の中国系アイデンティティには大きな影響を与えていない。多民族共生社会における多数派であるアフリカ系やインド系との相関関係、中国・台湾との心理的距離、家族の中国文化に対する価値観、身体的な特徴などの影響を強く受け、21世紀現在の中国系トリニダード人のアイデンティティは個人個人多種多様な様相を呈し、流動的であることが明らかになった。

1. はじめに

北をアメリカ大陸、南を南アメリカ大陸に挟まれたカリブ海地域には、大航海時代から続くヨーロッパ列強の植民地支配の影響を受け、多民族社会が構成されている島々が多く存在する。その人種・民族別人口構成は島ごとに異なるが、21世紀現在、規模の差はあれ、すべての島に存在するのは中国系の人々である。特にカリブ海諸島の最南端に位置するトリニダードは、イギリス支配を受けていた1806年から段階的かつ組織的に、中国の年季契約労働者や中国人移民が流入してきており、その後も現在に至るまで小規模で個人的な移住は続いている。

近年、カリブ海地域という枠組みにおける中国からの移民やその子孫の研究が国際的認知を得始めたが、本稿はあえて、トリニダードという一つ

の島における中国系市民に焦点を絞り、トリニダードにおける移民や中国系同郷組織創設の流れを把握することを目的の一つとした。そして先行研究と史料、そして2019年2月にトリニダードのフィールドワークで入手した資料を基に、多民族共生社会において彼らがどのようなアイデンティティを構築しているのか、そしてその構築過程にどのような要素が影響を与えているのかについて探求した。なお本稿は限られた先行研究を基に考察を行っており、より深い議論は別稿にて報告するつもりである。

2. なぜトリニダードの中国系を選定したのか

時に華僑、または華人と呼ばれる中国系移民は全世界に広がる。その中でトリニダードの中国系を選定した最大の理由として、中国から遠いカリ

ブ海最南端に位置し、千葉県ほどの大きさしかないトリニダード島から、中華民国の国民政府において外務大臣が輩出された事実を知り、中国本土とカリブ海の中国系ネットワークに関心を持ったことが挙げられる。

そして中国系移民に関する先行研究で取り上げられてきたジャマイカやガイアナなどカリブ海地域の国々よりも、トリニダードははるかに組織的な中国系移民史を持つ。そして中国系はより深くクレオール化しているのと同時に、中国系コミュニティは重層化している。そのためトリニダードの多民族共生社会においては、中国系が少数派として隔離されずに、中国系と非中国系の混血も進み、クレオール化社会の重要な一員として統合されている。このようなトリニダードにおける中国系について、多民族共生社会の中で帰属意識を促す中国系同郷組織と他民族との相関関係を通じて、他者の認識に基づいて自己を再認識する過程を明らかにすることで、カリブ海地域の島ごとの中国系の差異に関する知見に貢献することができると考える。

3. 「中国系トリニダード人」

カリブ海諸島最南端のトリニダードに中国から組織的な移民が訪れるようになったのは、大西洋奴隷貿易とイギリス領におけるアフリカ人奴隷によるプランテーション経営が盛んであった 1806 年である。しかし現在はトリニダードに商用で訪問する旅行者であっても、観光客であっても、身体的特徴から明らかに中国人と認識できる中国系とは滅多に出会わないであろう。2011 年の国勢調査によると、トリニダードの人口約 126 万人に対して、アフリカ系またはインド系と自身を認識している者がそれぞれ 30% 強を占める中、中国系は 0.3% しか存在しない¹。近年の傾向として、自身のある特定の民族であると限定して認識する者は減り、その代わりに「混血」と自己認識する者が増えてきている。そうした傾向の中で、身体的特徴が純血の中国人であると想像できる中国系に出会いたい場合は、トリニダードの法曹、金融、医療といった業界を覗くのが良い。中国系はそれらの社会で役職についていることも少なくない。銀行や病院開催の社交行事に参加すると、身体的特徴が中国人である中国系に多く遭遇する他、身体的

特徴はアフリカ系であってもファミリーネームとミドルネームが中国由来の中国系に出会うことができる。

本来「クレオール化」や「クレオール」は、トリニダードを含むカリブ海地域において、旧宗主国などの欧米文化優越主義による現地文化の否認から脱却するために創設された概念であった²。しかし現在は、植民地支配の産物としての社会や人々、言語や文化などの混淆現象を肯定的に表現する概念として用いられる。本稿で扱うトリニダードの中国系は、社会少数派として、多数派のアフリカ系やインド系、また植民地時代から圧倒的な経済力を持っているヨーロッパ系などと空間を共有することで、相互に多大な影響を与え続けてきた。つまり混血や異文化の折衝などを経験しながら、個人個人でその程度の差はあるものの、中国系はクレオール化され続けている。

その中国系のアイデンティティ、つまりトリニダードや中国または台湾への帰属意識や、トリニダード社会における「自分は何者か」という自己認識には、様々な要素が影響している。その中でも言語や文化などの共通性を強調する中国系同郷組織の存在は大きい。アイデンティティ、特に Albert and Whetten が提唱した中心性、独自性、連続性を持つ「組織アイデンティティ」の概念³は、企業など組織に属する者のアイデンティティに組織がどのような影響を与えているかという研究として、近年、本邦でも研究が盛んである⁴。中国系同郷組織については、福建同郷組織が日本で果たしてきた役割と課題について本邦においては姜・辻田が研究を行っており、日本社会における福建出身者のネットワークや、新旧移住者のニーズの違いなどを明らかにしている⁵。

トリニダードにおける中国系に関しては、自身もトリニダードの中国系である Look-Lai⁶ や Johnson⁷ などが、幅広い研究やイギリス植民地時代の文書や個人所有の中国系に関する写真などの保存活動を行っている。また新大陸における中国系移民研究としてトリニダードをフィールドに選び、オーラル・ヒストリーに基づいて中国系移民 2 世以降の中国系がどのように中国系 1 世と折り合いをつけながらホスト社会に順応しているかを明らかにした Hong⁸ の研究も興味深い。

また本邦では、カリブ海地域の中国系移民研究

として、柴田⁹が中国系とその混血のエスニシティについて他の混血との共通性や差異を基に批判的検討を行っている他、園田¹⁰はカリブ海地域の中国系市民の再移住について多面的な分析を行っている。このようにカリブ海地域における中国系移民とその移民2世や3世、また他社会構成員との混血に関する研究は近年やっとな国際的認知を得始めてきたところである。

トリニダードにおける中国系の移民史を以下の4段階に分けて提示する。前述の Look-Lai¹¹ と Johnson¹² の資料と、聞き取り調査を通じて中国系から入手した一次資料を基にしたが、Look-Lai と Johnson の主張のうち、例えば船ごとのトリニダード上陸者数の数値に違いが見られるときには、より緻密な史料調査を行っている Look-Lai の数値を採用した。

表1. トリニダードへの中国移民到着数

到着年	乗船地	乗船数	下船数	男性	女性	乳児
1806	ペナン/マカオ/カルカット	200	192	192	0	0
1853	汕頭	445	432	432	0	0
1853	広東	254	251	251	0	0
1853	汕頭	314	305	305	0	0
1862	香港	547	467	342	125	2
1865	広東	320	313	212	101	2
1865	広東	289	280	204	76	0
1866	アモイ	286	272	271	1	0
1866	アモイ	327	325	319	6	0
	合計	2982	2837	2528	309	4

3.1. 第1波「1806年組」

1797年に領土としたものの、当初イギリスはその頃カリブ海地域で盛んだった砂糖プランテーションとしてトリニダードを開拓することに全く関心を持っていなかった。そのため1806年にトリニダードに到達した中国人に対して、トリニダード政府は、「トリニダードの人口を増やし、何らかの経済活動をしてくれたら十分」程度の期待しかしていなかった。実際、1806年にやってきた中国人のうち、アフリカ人が奴隷として働いていた砂糖プランテーションに労働者として職を求めた者は少数であった。

トリニダードの肥沃な土地からもたらされる

経済的成功の可能性を喧伝され応募してきた1806年組は、当初1805年12月にペナン島を経由しながらマカオを出発した147人の男性だけで構成されていた。その後、1806年2月に到着したカルカットで、さらに53人の中国人男性が加わり、5月にカルカットからトリニダードに向けて計200人の中国人男性が出発した。航路途中の南大西洋に位置するセント・ヘレナ到達時には、194人と記録されており、また1806年10月12日にトリニダードの首都ポート・オブ・スペイン到達時には、192人となっていた¹³。これはアフリカ人を奴隷としてアフリカ大陸からカリブ海地域に移動させた大西洋奴隷貿易の時と比較すると、はるかに低い死亡率であった。

稼ぐためにトリニダードにやってきた1806年組は、トリニダード到着後4日間も仕事を与えられないことを心配し、到着5日後にして植民地政府役人に労働者として雇ってもらえるよう交渉を始めたという。船が着いた首都ポート・オブ・スペイン周囲には、未開墾地はなかったため、既存の砂糖プランテーションで働き始めた者以外は、首都から約6km離れたココリート地区のサベイランス・エステートに住み始め、靴職人や植物園での庭師として働き始めた者もいた。植民地政府が用意したこのエステートには宿舎や漁船が用意され、外科医や看護師も勤務しており、植民地政府が中国から来た新しい島の住民を厚待遇で歓迎していたことがわかる。

しかし到着して6ヶ月も経たない1807年3月までに7人が亡くなった。次々に仲間が亡くなっていく現実を前に、1806年組の多くはトリニダード開拓のために働き続ける熱意を失った。また彼らを勧誘してトリニダードに連れてきた植民地政府役人たちも、トリニダード開拓に強い関心を示さないイギリス本国の相手をするのに疲れきっていた。そして1807年7月には生き残った1806年組のうち61人が中国へと帰っていった後、さらに1807年10月までに17人が亡くなった。

1809年までには、1806年組の多くは、ありとあらゆる手段を使って中国へ帰国したり、何らかの原因で亡くなったりしており、30人弱しか残っていなかったとされる。実際、1810年の人口調査では、蟹や牡蠣、竹炭を売りながら暮らしている悲惨な生活ぶりの中国人男性22人の集落が

ココリート地区に確認されると記されている。

トリニダードで生き残った 1806 年組のうち何人かはアフリカ人奴隷の女性との間に子どもを設けており、そのうちマカオ出身の一人は奴隷を所有するまでに裕福な存在になった。1806 年組のうち定住した者の多くは漁師や肉屋となり、スペイン語と英語を習得し、小さな中国人コミュニティの中で僅かな金を貸し借りしながら経済的に助け合い、トリニダードでの生活の質の向上を目指していた。一部には、ココリートに隣接するディエゴ・マーティンのカトリック教会で洗礼を受け、アイルランド名を名乗り始めた者もいた。1806 年組のうち、1824 年に 12 人、1834 年に 7 人と記録されたのを最後に、記録上、中国人移民のコミュニティに関する記載は見受けられなくなった。

3.2. 第 2 波

1833 年に、他のイギリス植民地と同様にトリニダードでも奴隷制が廃止されることが決定してからというもの、アフリカ人奴隷の労働力に依存しきっていたトリニダードの砂糖プランテーションは、奴隷に代わる労働力をいかに確保するかという問題に頭を悩ませた。そして「1806 年組」の顛末を忘れたのか、当時フィリピンやジャワ島の砂糖プランテーションを成功させていた中国人労働者に、またしても白羽の矢を立てた。5 年間の年季契約労働者としての中国人にとってトリニダードを魅力ある移住先とするため、様々な権利が保障された。例えば、最低賃金や住居、子女の教育や病気休暇などが約束され、同行してくる子ども一人当たり 5 ドルが支払われ、妻や成人した娘には 20 ドルが支払われた。その契約内容に惹かれて海を渡ったのは、アヘン戦争や太平天国の乱、そして様々な土客械闘から逃れてきた難民や避難者であった。彼らの帰路は保証されていなかったが、前述のような契約内容全般は、同時期にインドから渡ってきた年季契約労働者よりも良かったと言える。

1853 年 3 月 4 日にはオーストラリア号がトリニダードに年季契約労働者として中国人男性 432 人を連れてきた。8 人が到着後すぐに入院したが、残りの労働に耐えうる者のうち 331 人はトリニダードに点在する 18 の砂糖プランテーシ

ョンに配属された。翌月 4 月 23 日に到着したクラレンドン号は、航海中に 3 人が亡くなり、251 人の中国人を連れてきた。そのうち入院した 2 人以外はトリニダード各地に点在する 12 の砂糖プランテーションに配属された。同年 6 月 28 日にはフロラ・ヘイスティングス号が 303 人の労働者と共に 2 人の中国人医師も連れてきた。このうち 12 人は到着直後に入院したが、残りは 17 の砂糖プランテーションに配属された。1853 年にトリニダードに到着した計 988 人の中国人労働者のうち、1 年以内に計 117 人が亡くなり、そのうちの 1 人は自殺であったという。

1853 年に到着し、無事トリニダードに定住した 871 人についての逸話がいくつか残っている。トリニダード南部の南ナパリマ地区にあったジョーダンヒル・エステートに配属された中国人たちは、ラム酒の味を覚えるのが早かったとある。また現在トリニダード唯一の国際空港であるピアルコ国際空港に近く、現在も農地として利用されているオレンジ・グローブ・エステートでは中国人労働者の反乱があったという。前述の、フロラ・ヘイスティング号で渡航してきた医師 2 人のうち 1 人は中国に帰国したが、もう 1 人は現地人女性と結婚して定住した。1853 年にトリニダードに到着した中国人のうちの 9 人は、同年末に窃盗の罪などで留置所に拘留されたが、その他の多くの中国人労働者は砂糖プランテーションでの労働の他に、自宅農園で野菜を作り、鶏と豚を育てて利益を上げ、定住への第一歩を確実に踏み出していたという。

1853 年にトリニダードにやってきた年季契約労働者の契約が終了した 1858 年の人口調査によると、665 人の中国人が確認されている。そのうちの 225 人は自身の契約労働期間を買い上げ、自由労働者として、多くは商店を開くなどして、経済的に成功していた。またその他の 310 人は砂糖プランテーションに所属しているものの、その多くはサトウキビ耕作に関わる肉体労働ではなく、労働者を監督する管理職に就いていた。

1862 年 6 月 3 日、新たにワナタ号が香港から連れてきた中国人労働者 467 人の中には、トリニダードに上陸するなり、逃亡したり自殺を図ったりした者もいて、トリニダードで稼いで一旗揚げようとする全体としての意気込みは明らかに低

調であったようだ。2年後には男性179人と女性3人しか砂糖プランテーションで働いていなかった。ワタナ号には、すでにトリニダードで働いていた中国人のための花嫁として連れてこられた122人の中国人女性が搭乗していた。しかしその多くはトリニダードに到着してから「役に立たない」という理由で結婚を拒まれたという。纏足をしていた一部の女性たちは砂糖プランテーションでの労働には不向きであった他、纏足をしていないその他の女性たちも農業に慣れておらず、労働力としての即戦力にはならなかった。

1865年2月18日にモントローズ号が、同年5月25日にパリア号が、広東から593人(男性416人と女性177人)の中国人労働者を18人の雇用主のために連れてきた。1866年2月12日にダブルック号、そして同年同月24日にレッドライディング号が連れてきた計597人のうち40%は、働き始めてからすぐに砂糖プランテーションから消えた。砂糖プランテーションで働き続けた者も、年季契約期間満了後すぐに、砂糖プランテーションから追い出された。これは中国人労働者が様々な権利を主張するため、砂糖プランテーション領主にとって重荷になったからだという。

こうした中国人移民のトリニダードへの組織的な流入は1866年で終わった。1853年から1866年の間にトリニダードに渡った中国人の多くは、マカオ、アモイ、広東、香港の各地出身であった。合計で2982人(内女性367人)がトリニダードに向け出航し、2837人(内女性309人)が上陸に成功した。航海中に145人が亡くなり、4人が産まれた。トリニダードに到達した彼らはトリニダード社会に適応し、速いスピードで社会階層を上っていったと評価されている。彼らが砂糖プランテーションでの労働の合間に行っていた野菜栽培や家畜飼育は、確実に彼らの収入の足しとなっていたため、砂糖プランテーション労働から解放される機会を早めることにつながった。さらに砂糖プランテーションから解放された後に、商店を開いたり、貿易に携わったりする者が出てからは、罪を犯したり、浮浪者になったりして留置所や監獄に入る中国人の数は劇的に減った。

3.3. 第3波

1880年から1900年にかけて、そして1910年

から1940年にかけては、中国国内の混乱を避け、中国からカリブ海地域をはじめとするラテンアメリカ各国への移民が激増した時期である。特に1920年代と1940年代は、トリニダードへの中国人移民が劇的に増加した時期であり、彼らは血縁を頼ってトリニダードに上陸後、主に貿易業に従事した。彼らと彼らの子孫こそが、現代のカリブ海地域における中国系コミュニティの礎を作った人々であり、1940年代までには中国系はトリニダード社会における成功を収めた少数派として認識された。つまりこの頃までに中国人移民は、中国系トリニダード人としての地位を築き上げたのである。

3.4. 第4波：「ニュー・チャイニーズ」

1950～70年代前半は、中国からトリニダードへの移民は限られていたようである。しかし1970年代後半になると、さらに中国からの移民がトリニダードへ流入した。これが現在まで細々と続く第4波の中国からの移民であり、現代のトリニダード社会では「ニュー・チャイニーズ」として、19世紀から20世紀前半に移民してきた中国人とは区別して呼ばれる人々である。

またニュー・チャイニーズの中には、中国政府に資金援助を受けた政府系インフラ事業の工事を担う建設作業員として、短期間の予定でトリニダードに滞在している者も含まれる。彼らは英語も話せず、服装や歩き方、話し方や話し声の音量など、「非常に中国人的」であると、中国系2～3世のトリニダード人は表現する。



図1. 防犯対策の鉄格子を設置した中国系食料商店。

4. 中国系同郷組織の創設と変容

トリニダードには中国系が移住する前から、アフリカ系の民族別組織がいくつも存在していた¹⁴。インド系は言語別や宗教別の組織を形成し¹⁵、ポルトガル系も言語別と出生地別の組織を形成した¹⁶。同様に、中国系もさまざまな中国系同郷組織を形成した。中国系同郷組織は他社会構成員の組織よりも、より詳細な分割に基づいた組織形成がされており、時にはその分割ラインは交錯している。民族別、言語別、中国内出身地別の組織の他、中国生まれ対象の組織、トリニダード生まれ対象の組織など、多数の中国系同郷組織が存在している。それは言語と中国内出身地における違いが、中国系1世の帰属意識に大きな影響を持ち、トリニダードという多民族共生社会においては、中国系のアイデンティティ構築に密接に関わってきたことを意味する。しかし中国系2世以降は、中国系1世である親の中国と中国語、中国文化への傾倒に必ずしも賛成せず、中国系同郷組織からは距離を置く者が増えてきている。

現在は、The Chinese Society がトリニダードの五つの中国系同郷組織(The Chinese Association of Trinidad and Tobago, The Fui Toong On Association, The Toy Shan Association, The Chung Shan Association, The Sun Wai Association) を傘下に置いて活動する他、The Chinese Civic Association が細々と、しかし確実に活動を行っている。本章では、時代と共に名を変え、目的を変え、他のグループが派生したり、合併したりしてきた中国系同郷組織を、最初の設立時に基準とした言語や中国内出身地別に、系統立てて総括する。そうすることで、乱立してきた中国系同郷組織の社会における役割や意義を明らかにしたい。

4.1. 中国系同郷組織：初期から現在に至るまで

歴史的に中国との通商を行う商人が多かったトリニダードの中国系は、首都ポート・オブ・スペインで商業活動が最も活発なシャーロット・ストリートに事務所を置くことを重要視した。現在でもシャーロット・ストリートはダウンタウンの中で最も商業活動が活発である。それは軒を並べる中国輸入品の安価な服飾品小売店や中国系食料商店が高い集客力を持つからである。以下のとおり、中国系同郷組織の現在に至るまでの設立の歴史を

住所別にまとめた。現在も活動している組織は下線を引いた。

(1) シャーロット・ストリート 19 番地

a. The Chinese National Association

1914年にトリニダードで初めて設立された中国系同郷組織である。これは、1920年代に孫文政権の外務大臣にもなった、トリニダード南部都市サンフェルナンド生まれの陳友仁(Chen, Eugene)が中心となって設立したものである。

b. Trinidad Branch of The Chinese National Party

1917年、The Chinese National Association から Trinidad Branch of The Chinese National Party と組織名の変更を行った。別名は The Kuomintang Association である。これは、1911年10月10日の武昌起義に感化されたトリニダードの中国系たちの民主主義擁護と中国出身者として団結する意識が高まったため決起した動きである。

b-1. The Chinese Patriotic Relief Fund

b-2. The Anti-Japan Association

b-1.とb-2.共に、1937年7月、日中戦争の最中、前者はEdwin Lee Lum、後者は中国生まれのAlbert Moyouが立ち上げた。資金集めや反日デモ、日本製品不買・破壊運動を行い、中国本土との結束を呼びかけた。1939年に第二次世界大戦が勃発するやいなや、英国赤十字社に2台の救急車を贈与した。

b-3. The Chinese Women's Working Party

中国系の女性から構成され、炊き出しなどで反日デモや様々な運動の裏方を担った他、一部の会員は英国赤十字社に参加し、有事の際に必要なとされる救急医療の訓練を受けるなどした。

c. The Chinese Commercial Association

Trinidad Branch of the Chinese National Party の活動が政治的なものに限定されてきたため、1919年に中国系のビジネス活動支援を目的に首都ポート・オブ・スペインのジョージ・ストリートに設立された。中国文化継承の場に限定せず、中国系のビジネスネットワークを強める目的を持つ。なお1947年まで、中国系商人はトリニダードの商工会議所のメンバーにはなれなかった。しかし、

1919年にはビジネスネットワークを推進するための組織が必要となっていたほど、中国系はトリニダードの商工業に大きく関わっていたと言える。

d. The Chinese Association

1930年、政治経済活動に限定されない活動を行うために再編成された。

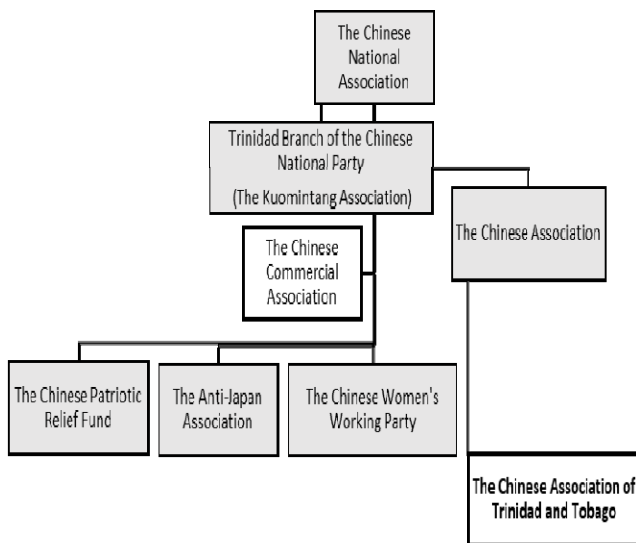


図 2. The Chinese Association of Trinidad and Tobago 系列中国系組織相関図

e. The Chinese Association of Trinidad and Tobago (千里達中華会館)

1945年に法人化した際、The Chinese Association から The Chinese Association of Trinidad and Tobago (千里達中華会館) と名称変更し、現在に至る。すでにトリニダードで成功を収めた中国系 2 世の Edwin Lee Lum などは、シャーロット・ストリートで古くから培われた中華系の時代遅れのメンタリティ、つまり中国との極めて強い精神的な繋がりから脱却しようと、心機一転、初めてトリニダードへ中国系が上陸した土地であるココリート地区への移転を試みた。結局、その試みは失敗に終わり、1944年に、フレンチ・コロンIAL様式の美しい建物が鎮座する、セント・アン・ロード7番地の広大な土地を購入し、移転した。そこで中国系でなくても参加できる空手教室

やスチールパン教室などを開催し、現在は中国系に限らず、多くのトリニダード人が好意的に「中国系の場所」として認識できるような開放的な活動をしている。とはいえ、Hong¹⁷によると、誰でも施設利用はできるが、The Chinese Association of Trinidad and Tobago の会員になれるのは、中国系の中でも特に混血があまり進んでいない中国系だけである。

f. The Chinese Civic Association (中華国民協会)

現在シャーロット・ストリート 19 番地に事務所を構えるのが The Chinese Civic Association である。一階に小売店を置き、2階正面には台湾の国旗を模した The Chinese Civic Association の看板が掲げられている。いわゆる「一つの中国」政策を支持するトリニダードにおいては、他の中国系同郷組織と比較し、メディアや公共の場への出現機会は非常に限られたものである。しかし細々とはあるが確実に活動は継続している。その中でも特に言及すべきは、カリブ海地域における台湾承認国と台湾との仲立役としての活動である。

2019年現在、ハイチ、セントクリストファー・ネイビス、セントビンセント及びグレナディーン諸島、セントルシア、ベリーズなどは台湾承認国である。その中でも特に 90年代から政権交代のたびに「一つの中国」と台湾承認との間を揺れ動くセントルシアにおいては、不安定な外交関係がもたらす非効率な経済支援が社会開発を鈍化させるなど社会への悪影響が確認されている。The Chinese Civic Association はカリブ海地域の脆弱な経済基盤を持つ国々が台湾を承認する立場を取ることによって経済的な不利益を被らないように、またそれらの国々から継続した台湾承認が得られるように、カリブ海地域では比較的経済規模が大きいトリニダードの事務所からさまざまな支援を行っている。

(2) シャーロット・ストリート 12 番地

a. The Yee Lee Club

トリニダードの中国系コミュニティには広東出身者が非常に多い。トリニダード社会の少数派である中国系の中でもさらに少数派である客家としてのアイデンティティを保持するため、トリニダードで初めて設立された、客家語を話す者が集まる中国系同郷組織である。設立当初

はジョージ・ストリートに位置した。

b. The Fui Toong On Association 惠東安協会

1919年7月24日に、The Yee Lee Club から The Fui Toong On (Ow) Association (惠東安協会) と名称変更し、現住所にオフィスを構えた。トリニダードに渡った客家の子孫の心のよりどころとしての役割を果たしている。

(3) シャーロット・ストリート9番地

1934年から1936年の間に、広東省の南西に位置する台山地域から移住した者たちの子孫が、首都ポート・オブ・スペインのクイーン・ストリート67番地で定期的に集会を開くようになったのが The Toy Shan Association (台山同郷会) の始まりである。1936年以降は、フレドリック・ストリートの貸しビルに会場を移した。

その後、1940年にシャーロット・ストリート9番地に移転し、現在に至る。この地に建つ台山同郷会のオフィスでは会員の会合が開かれる他、貿易に携わる台山地域からの出張者や、モルーガやペナルなどトリニダードの地方から首都に商品売買に訪れた台山系の小売業者のために10部屋の宿泊施設を用意している。会員同士の対立の仲裁や、会員またその家族のために資金援助も行っている。

(4) シャーロット・ストリート129番地

1930年代に広東省中山地区からの移住者が始めた団体を基に、1958年に The Chung Shan Association (中山同郷会) が創設され、1964年に現在の住所へ移転した。中山からの移民のために、トリニダードで商店やレストランなどのビジネスを行うためのネットワーク作りや、娯楽の機会提供をしていた。また、すでにトリニダードに定住している中山からの移民に対し、中国から花嫁を呼び寄せるための書類手配の代行をしていた。

現在は、年に一度のみ会合が行われているが、シャーロット・ストリートの事務所で開催するには駐車場やセキュリティの確保が困難であるため、レストランなどで行なっている。また、かつては中国語を話すことができる人を会員資格に掲げていた。しかし非中国系との結婚や、移民2世、3世の中には中国への帰属意識を持たない者

が増えたため、このルールの特続が難しくなった。そのため2018年の会合からは会員資格を以前のように制限しないこととした。とはいえ、入会希望者はほとんど存在しないのが現実である。

(5) クイーン・ストリート36番地

1954年、The Sun Wai Association (新会同郷会) が創設された。1950年代に、広州市近くに位置する新会 (Sun Wai) 地区から移住した人々の同郷会である。先にトリニダードに移住していた血縁者と再会するためのネットワークづくりや、新たにトリニダードで商店・洗濯店・中国料理店といったビジネスを始めるための資金援助などを行っていた。現在は会員数が減少し、日常的にはクイーン・ストリートの事務所は使われておらず、新会移民の子孫が集まって中国の伝統行事を祝ったり、チャリティの資金集めをしたりすることが主な活動となっている。



図3. The Sun Wai Association (新会同郷会) 事務所。

(6) シャーロット・ストリート 16 番地

a. The China Society (中華総会)

1956 年、乱立する中国系同郷組織をとりまとめるため、The China Society が設立された。この The China Society は、トリニダードの中国系名士が会長を務めることで、トリニダードにおける中国系の地位を強固にしていった。トリニダード社会における The China Society の政治的影響力がピークに達したのは、1961 年から 1969 年に、Albert Moyou が会長となったときであろう。彼はトリニダード・トバゴ共和国初代首相 Eric Williams を娘 Siulan の婿として迎えた人物である。その頃には The China Society や中国系の存在はトリニダード社会において軽視できないものとなっていた。

様々な分野で精力的な活動を行っていた The China Society であるが、基本的な活動は以下の 4 点であった。

- ・ 中国生まれの移民の社会的・経済的自立支援
- ・ 中国系貿易商人・小売店主などへの様々な情報提供・情報収集
- ・ 中国系のみならず、すべてのトリニダード・トバゴ国民のために、学校や病院の設立・運営、奨学金賞与、生活支援、老人ホーム運営
- ・ 言語や舞踊、料理など中国文化の継承

4.2. イギリスから独立後の中国系同郷組織

1963 年にイギリスからの独立を果たしたトリニダードであるが、独立後も植民地時代から変わらず、人種や混血の度合いによる肌の色を基準とした階層社会が続き、トリニダード国内の商工業の重職はヨーロッパ系が占めることが少なくなかった。しかし 1970 年になると、トリニダード生まれの中国系は、カントリー・クラブやヨット・クラブなどの、いわゆるかつての植民地エリート・クラブへのアクセスができるようになるほど、社会的階層の上位に位置するようになっていった。

この中国系の社会的階層における上昇は、非中国系に好意的に受け止められなかった。つまり、多くのアフリカ系やインド系にとって、中国系は彼らを裏切り、彼らを抑圧する側にまわったと受け止められ、抜け駆けされて裏切られたという印象を受けた。時に、70 年代のトリニダードは、

アメリカの公民権運動の余波を受け、非ヨーロッパ系の人権保護と植民地時代から続く富と機会の不平等の是正を求めたブラック・パワー運動が全盛を極めていた。アフリカ系政権である政府は、社会多数派であるアフリカ系の要望を The China Society に伝えてきた。その要望をもとに、1972 年に The China Society は青年活動グループに 10 万ドルを寄付し、決して敵対する立場にはないことを証明するため対応を重ねた。

しかし 1974 年には中国系のシンボリック的存在であったシャーロット・ストリート 19 番地の The China Society の事務所が焼き討ちに遭い、Trinidad Branch of The Chinese National Party は焼け落ちた。その後、道向かいの The Fui Toong On Association に近いシャーロット・ストリート 12 番地に移転した。この頃から身の危険とビジネスの将来を心配した多くの移民たちがビジネスを閉め、バンクーバーやサンフランシスコ、ニューヨークやトロントといった北アメリカ各地に移住していった。

そのような中、The China Society の号令のもと、いくつも存在する中国系同郷組織や様々な「協会」をまとめ、事業や目的別に特化して強化するため、併合が行われようとした。しかしその頃には、中国系の背景や中国語への思い入れは様々になっていた。そのため共通語が設定できず、会議を開いても意思疎通がままならなかった。つまりトリニダード生まれの中国系には、中国語を全く使えないどころか、使えるようになるよう努力もしなかったり、中国語を聞いて理解できるが話せなかったり、中国で教育を受けてトリニダードに帰ってきたため、英語がままならなかったり、など様々なパターンの者が存在するようになった。さらに中国生まれの者は、英語が得意でない。また英語でなければ、どの地方の中国語を共通語にするのかという問題も、在トリニダード中国系の中国内出身地別の勢力問題につながるため、一つの言語に定められない。このような問題を抱えながら、中国系同郷組織はそれぞれの関心事項を忠実に遂行し、トリニダードの中国系同郷組織としては四分五裂の状況が続いていた。



図4. 現在の中国系同郷組織の関係図

4.3. 現在の中国系同郷組織

このような問題を抱えながらも、The China Societyは、1986年に5つの中国系同郷組織をメンバーとして抱えた有限会社として再編成された。5つの組織とは、以下のとおりである。

- The Fui Toong On Association
- The Toy Shan Association
- The Sun Wai Association
- The Chung Shan Association
- The Chinese Association of Trinidad and Tobago

上記の他に、事務所に台湾の国旗を掲げるThe Chinese Civic Associationが活動しているが、The China Societyの傘下には入っていない。

現在、The China Society傘下の5つの同郷組織とThe Chinese Civic Associationは、組織設立の意図や、トリニダード政府・中国本土政府との距離も、それぞれ異なるため、時に意見や利害関係が衝突することもある。そのため、必ずしもすべての組織が常に良好な関係のもとトリニダードの中国系コミュニティの一員として活動しているわけではない。しかし中国政府要人がトリニダードに訪問する際などには、The China Societyの調整のもと、5つの中国系同郷組織が一同に会する機会を設け、トリニダードの中国系コミュニティ

の代表として中国からの要人をもてなしている。他方、事務所に台湾旗を掲げるThe Chinese Civic Associationは中国本土系の公式行事には参加することはない。

5. 中国系同郷組織とアイデンティティ

5.1. 現在の中国系同郷組織と中国系

前項では、様々な時代に様々な理由で中国からトリニダードに移住してきた者たちが、言語や文化の保存、子女の教育、様々な情報交換の場として、それぞれ民族・言語・中国内出身地域別の中国系同郷組織グループを設立した経緯を提示した。近年柔軟な対応がされるようになってきているが、それらの中国系同郷組織の会員資格は、混血でない中国系であることと中国語が話せることであった。昨今では非中国系との混血が進み、中国文化に親近感を持たない、中国語も話せない中国系が増加する一方で、アフリカ系やインド系などのさまざまな文化が混淆したトリニダード文化に親しむ中国系が増加するなど、中国系のクレオール化は深化している。現在も活動を続ける五つの中国系同郷組織とそれを統括するThe China Society、そして台湾系のThe Chinese Civic Associationは多様化する21世紀の中国系とどのような関係にあるのか。

(1) 中国系同郷組織の役割

トリニダードには一年間のうちに、中国系の祝祭行事がいくつかある。今でも台湾から新聞や雑誌を取り寄せているThe Chinese Civic Associationは、中華民国の建国記念日である双十節（10月10日）にシャーロット・ストリートで獅子舞を行うのが毎年の恒例行事となっている。他には例えばドラゴン・ボート大会であるとか、獅子舞パレードであるとかいった、中国系以外の一般市民も参加できる文化イベントを主催するのはThe Chinese Association of Trinidad and Tobagoである。そのため、トリニダードの中国系といえば、同組織を思い浮かべる市民は少なくない。反対に、一般市民には直接的に関係ない中国本土との（外交）活動の担当はThe China Societyであるため、特に非中国系のトリニダード市民にとって、The China SocietyはThe Chinese Association of Trinidad and Tobagoほど身近な存在ではない。

The Chinese Association of Trinidad and Tobago と The China Society は、同じように文化行事を開催したりするため、違いがはっきりとしないこともある。しかしトリニダード社会では、前者はトリニダード社会での文化継承活動、後者は中国本土との（外交・経済）活動を担当するとして、デマケーションははっきりしている。例えば、2019年5月に駐トリニダード中国大使と上海市次長がポート・オブ・スペイン市長と共に、シャーロット・ストリートを中華街とすべく、門とアーチ道を建設する案を発表した¹⁸。これは2013年に発表された「一带一路」をトリニダード・トバゴ政府が支持することへの見返り¹⁹として、上海市とポート・オブ・スペイン市の関係強化を図るものであるが、この式典に参加したのは、The China Society であって、The Chinese Association of Trinidad and Tobago ではない。そして The Chinese Civic Association は、式典はおろか、The China Society 傘下のすべての中国系同郷組織が参加した懇談会にも参加していない。

(2) 中国系同郷組織の会員数減少

今も昔も、すべての中国系がいずれかの中国系同郷組織に強制的に属さなければいけないわけではない。中国系同郷組織に自発的に所属を希望し、会員として自身の帰属意識の保持や高揚を目的とする中国系が多く存在するうちは、まだ中国系同郷組織の存在意義が確認できた。家庭において、祖父母などの中国系1世の老人たちから、彼らの出身地である中国の故郷での思い出話を聞いて、訪問したこともない遠く離れた中国に憧れを募らせ、中国への帰属意識の高揚が中国同郷組織への参加につながっていた。

そのような状況の中、特に1970年代～80年代にかけて、ブラック・パワー運動が、社会多数派のアフリカ系とインド系を社会的に虐げていると、中国系を非難の対象としてからは、中国系の同郷組織に対する姿勢に変化が見られた。まず実質的な危害を加えられる前までは、多数派に対して少数派である中国系として、中国系であることを共通項に団結する風潮も見られた。中国系同郷組織に所属し、親や祖父母以外の年長者から話を聞くことで、自身のルーツを確認し、親または祖父母世代の出身地への憧れを募らせただけでは、中国系とアフリカ系・インド系とは、トリ

ニダード社会で共存していく上で相容れない点も多々あるが、中国系は同組織に属することで、多数派との歴史的・経済的・政治的相違点の理解に努め、自身のトリニダード社会での处世術を学んだ。

しかし一連のブラック・パワー運動による実質的な被害が続くと、一部の中国系のトリニダード社会に対する姿勢が変わった。同郷組織の事務所が放火され、中国系商店が強盗にあい、中国系ビジネスがボイコットされ、日常生活でも中国系であることを理由とする嫌がらせが続いた。その対象は、中国系成人男性のみならず中国系の子どもにまで及んだ。そのため少数派としてトリニダード社会で多数派と共存する将来性に不安と限界を感じた中国系は、北米への移住を進めた。

その結果、中国系の人口が激減し、必然的に中国系同郷組織の会員も減少した。そうすると中国系同郷組織は一定の会員数を確保するため、既存会員に対し、親戚や子女を会員にすべく働きかけを行った。親や祖父母に中国系同郷組織へ強制的に連れて行かれた中国系2世や3世が抱いた中国系同郷組織への感情は好意的なものではなく、またその評価も高くない。

(3) 中国系同郷組織が不人気である理由

① 実利がない

中国系2世以降が中国系同郷組織と距離を置く要因に、現代のトリニダード社会において中国系が直面する現実に即した活動が行われていないことが挙げられる。中国系同郷組織が主催する春節祝賀会やドラゴン・ボート大会は、中国系としてのアイデンティティを再認識する機会になる。しかし、多くの中国系2世以降にとって、中国系同郷組織は中国系1世が「過去を懐かしみ、昔話をするだけの集まり」であり、会員としての責任として集会には参加するが、「食事とアルコールが提供されないのであれば中国系同郷組織の集会に参加する動機がない」²⁰。

中国系同郷組織の主な活動メンバーが高齢であること、また会員数が少ないことから、集客力のある行事を中国系同郷組織が単体開催できないことは事実である。また既にビジネスで成功している中国系は会員であっても、行事のために資

金支援するだけで、行事当日は不参加であるため、実利のあるネットワークの機会としての役割は果たせない。そして昨今の中国移民の一部は、中国政府のトリニダード政府に対するインフラ支援に関わる建設要員としてトリニダードに渡航して、プロジェクト終了後、そのまま定住を希望するというケースが少なくないが、その際、住居や仕事を探すときに、現地事情に精通した者の支援を必要とする。この時に中国系同郷組織が支援を行う対象は会員のみである。しかし同様の支援は、会員であることを強要しない、中国政府やトリニダード政府も行っている。よって新たにトリニダードの住人となった中国系は、ネットワークの実利もなく、トリニダード社会に馴染むべく英語教室が開催されることもなく、中国語を話したい郷愁の念に駆られた中国系 1 世の昔話を聞き、同郷意識の共有を期待される中国系同郷組織の会員になる価値を見いだせないため、わざわざ入会を希望しない。

②差別的・排他的である

加えて、時代錯誤的な価値観が存続していることも現代の中国系に疎まれる理由であろう。つまり純血の中国系であることという入会条件は緩和されたが、会員の中国系 1 世や彼らの影響を強く受けてきた者たちの思考は必ずしも条件緩和とともに柔軟になったわけではない。現在の中国系同郷組織では、混血の中国系に対するあからさまな差別が存在するため、混血が進むトリニダードの多くの中国系にとって決して快適な空間とは言えない。ある中国系同郷組織の会員となった混血の中国系は、混血であるからゆえに、純血の中国系よりも劣っており、「本物」の中国系ではなく、「部外者」であるとされた。

特に 21 世紀現在のトリニダードで教育を受けた、社会少数派である中国系 2 世以降としては、多数派のアフリカ系やインド系と、どのようにトリニダード社会で平等な存在として共存していくかという問題の方が、トリニダードの中国系とどのように折り合いをつけていくかという問題よりも、圧倒的に重要であり続けてきたことは間違いない。そのため自身が中国系である事実を他者に強調するために、中国系同郷組織へ入会を希望する中国系の増加があるとは考えられない。そのため、中国系同郷組織の会員数の減少は免れな

い。

③現代の中国系のニーズに応えられない

もはや家族内で誰も話すことができなくなった父祖の言語を習得する必要性を真摯に感じることはないであろう。父祖の出身地と同じ出身地から移民してきたという理由だけで、父祖の同郷人との積極的な交流に魅力を感じる若者が多くいるとは考えられない。しかしその中でも、自身のルーツである中国について学びたいと希望する中国系は存在する。そのような中国系に、中国語が話せること、混血でないことを一方的に要求し、そうでない者を無条件に排除する中国系同郷組織は、トリニダードの中国系の現実とニーズを把握していないと批判されても仕方がない。トリニダードの中国系の現実には、混血がほとんどで、中国語は話せない。それでも中国や中国語、父祖の出身地に関する知識を得て、自身のルーツを大切にしたいと希望する現代の中国系のニーズがある。混血するも同郷の血が流れ、歩み寄ってきた中国系を、何の知識も与えずに一方的に遮断する排他的な中国系同郷組織よりも、包括的に他民族の文化を尊重し、多民族共生社会としてクレオール化が進むトリニダード社会を居場所として選択するのは必然的な動向である。

5.2. 中国系のアイデンティティ

哲学や倫理学においては「同一性」や時間的継続性を持つ自己同一性であるとされてきたアイデンティティであるが、本稿では社会学や心理学での概念である「自己理解」や「自己認識」としてのアイデンティティを採用する。またアイデンティティは「構築」されるものなのか、「形成」されるものなのか、「確立」されるものなのかという議論については、本稿で章を割く余裕はないが、本稿では「構築」を採用する。

(1) 多民族社会における他者の認識

多民族が共存するトリニダード社会の中で、どのように中国系が自身のアイデンティティを構築してきたのかという問題は、他者からの影響なしには語れない。トリニダードの中国系は、異民族同士が他者を他者として尊重し、相互の異文化を容認・受容し、共生している中で多様な文化の

混雑が進んだ、いわゆるクレオール化社会で独自のアイデンティティを構築してきた。つまり彼らは、アフリカ系やインド系などの非中国系との相互関係を通じて他者の存在を確認し、他者と自己を認識した。他者との交流を通じた自己の認識は、中国系に限ったことではない。クレオール化された多民族共生社会という同じ空間を共有しているという意味では、社会多数派であるアフリカ系やインド系も、また社会少数派ではあるが経済的・政治的に力を持つ社会少数派であるヨーロッパ系も、それぞれのアイデンティティ構築は他者の存在が影響を与えている。さらに昨今は、グローバル化現象を通じて、アイデンティティの流動性や複雑性が増しているという現状も否めない。

(2) 中国系コミュニティにおける他者の認識

加えて中国系のアイデンティティに影響を与えているのは、中国系コミュニティにおける他者の存在である。前項で挙げた中国系同郷組織の目的は、言語と中国内出身地に関する共通の認識を促進すること、そして中国系コミュニティの中でも自身の言語と出身地を重んじる価値を共有することであった。中国系同郷組織は、漠然と中国出身者、または中国出身者を父祖に持つ中国系であるとするだけの認識を促しただけではなく、中国系と呼ばれる人々の中における、そういった細分化された差異を認識することを目指した。そうすることで、トリニダードの中国系コミュニティの中で、特に「自分は何者であるか」という帰属意識と自己認識としてのアイデンティティが構築されるのを促してきた。

言い換えるならば、トリニダードの中国系同郷組織の他者を認識しようとする意識は、社会多数派のアフリカ系やインド系、また少数派のヨーロッパ系などに対して積極的に向いていなかったということである。むしろトリニダードの中国系同郷組織は、トリニダードの中国系コミュニティの中で、「自分たちはどの言語を話し、中国のどこから移民してきたのか」を共通項に、細分化された他の中国系との差異を強調し、同郷組織への帰属意識を促してきた。

(3) 中国との繋がり

また、様々な背景を持つ中国系の中には、移住

先のトリニダードよりも自身もしくは父祖の出身地である中国本土や台湾に強い繋がりを感じている者も存在する。例えば自身が中国本土や台湾から移住してきた中国系1世は、両親もしくは父と母のどちらかが中国系1世である中国系2世よりも中国や台湾との物理的・心理的な繋がり強い。しかしその中国系1世の中でも、中国や台湾に親・兄弟や親戚の多くを残していると、家族と共に移住してきた中国系1世よりも、中国や台湾に強い愛着を感じる者もいる。つまり中国系トリニダード人というよりも、トリニダードに住む単なる中国人もしくは台湾人であるとのアイデンティティを持ち、それと同時に広大な中国や台湾における自身の出身地との強い繋がり強調する者も存在する。

(4) 家族の影響

また中国系2世以降は、両親もしくは一方の親の中国系トリニダード人としてのアイデンティティに強い影響を受ける。身体的特徴は中国系そのまま、中国系としてのアイデンティティを強く持つ者が存在する一方で、身体的特徴から中国系であるとはわからないほど混血が進み、中国文化の知識は皆無でも、中国に由来する苗字を保つことに尽力することで、自身の中国系としてのアイデンティティを強調する者も存在する。苗字は西洋風で身体的特徴は混血風だが、中国系としてのアイデンティティを強く持つ者も存在している。自身の家族は純血の中国系だが、家族の大反対を押し切り非中国系の配偶者を持った者もいる。トリニダード食文化の家庭で育ったため、箸の使い方もままならない者や、中国との精神的距離が近い両親の元で育ち、中国系であるルーツに関する知識は豊富だが、クレオール社会に溶け込む際の足枷となるからと中国系であることを隠したい者もいる。中国語も話せず、漢字も読めない両親の元に生まれ育ったものの、中国系アイデンティティに目覚め、中国本土に留学する中国系3世も出てきた。

このようにトリニダードには様々な中国系が存在するようになった。その多くは父祖の中国内出身地についての知識はおろか、中国語もできない者たちである。つまり、中国系同郷組織が中国系の細分化された言語や出身地別の特徴などを

強調し、中国系に対し、中国と結びついた自己認識を促す試みは、クレオール化が進んだ社会に生まれ育った現代の中国系には通用しなかった。そうはいうものの、中国系の中には、父祖の出身地が異なる中国系との相違性を認識し、トリニダードの中国系の多様な背景を理解している者も存在する。そしてそれらの細分化された差異を中国系という枠組みの中に見出し、自身の帰属性に敏感になった。さらに、そのような中国系は、非中国系がその差異性と同質性に対し注意を向けないことにも影響を受けた。自身の認識と他者による非認識によって、さらに自身の帰属意識を強め、中国系コミュニティにおける他者と自己を認識している。その結果、トリニダードの中国系は「中国人」、「中国系」、「中国系トリニダード人」、「トリニダード人」としてのアイデンティティの間で揺れ動くこととなる。

6. まとめ

1806年から段階的にトリニダードへの移住を始めた中国系は、21世紀現在、トリニダード社会、中国との心理的距離、身体的な特徴に関して、個人個人多種多様な様相を呈している。そのためトリニダードの中国系コミュニティにおいて、トリニダードの中国系と名乗る人物に聞き取りを行ったとしても、その人物の発言内容がすべての中国系の経験を代弁しているわけではない。つまりすべての中国系がトリニダードにおいて同様の経験をしているわけではない。よって本稿は参考にした一部の中国系からの聞き取り資料によりトリニダードの中国系の全体像が明らかになったとは断言しない。本稿では、トリニダードの多民族共生社会において、中国系同郷組織と非中国系の他社会構成員が中国系のアイデンティティ構築にどのような影響を与えているかを考察した。

かつては民族・言語・中国内出身地など詳細な区別を基に、言語や文化の保存、子女の教育、様々な情報交換を目的として、トリニダードに移住してきたばかりの同郷人の定住を支援するため、様々な中国系同郷組織が設立された。中国系1世は郷愁の念に駆られ、言語と中国内出身地別について、それらの差異を強調し、中国系2世以降に帰属意識を強要してきた。そして中国系同郷組織は、純血の中国系で中国語が話せることを入会条

件としてきた。そのため現代の中国系の若者や、トリニダード社会に同化し経済的に自立を目指す新中国移民にとって、決して魅力的な存在ではない。

中国系同郷組織は、混血の中国系を部外者として、純血の中国系よりも劣る存在であるとする価値観を持ってきた。クレオール化が深化する21世紀のトリニダード社会においては、様々な民族が共存し、さらに混血が進み、中国語を話さない若い中国系が増え、自らの父祖の中国内出身地についての知識を持つ者は決して多くない。そのような若い中国系の帰属意識は、アフリカ系やインド系の社会多数派に対応する社会少数派としての中国系にある。つまり中国語や中国文化、また父祖の中国内出身地事情に通じている度合いよりも、中国出身の父祖を持つという事実のみが現代の中国系アイデンティティを支えている。

父祖の出身地である中国についての知識を深め、中国系としての認識を強めようとも、排他的な意識を持つ中国系同郷組織には頼れない。そのため、時代錯誤の差別的な価値観を持つ中国系同郷組織は、中国系にとって、帰属意識を感じ、自身のアイデンティティ構築に寄与するどころか、できるだけ距離を置きたい存在となってしまった。したがって、会員数は減少の一途をたどる一方であり、抜本的な改革なしでは中国系同郷組織の存在意義は失われるであろう。

現代の中国系アイデンティティ構築に与える中国系同郷組織の影響は決して大きくない。中国系同郷組織が重視してきた純血と混血の差異は、中国系の中国語や中国文化との精神的距離と必ずしも比例するわけではない。またその差異は、中国系としてのアイデンティティに顕著な違いをもたらすものでもない。他者の目には身体的特徴が中国系であっても、その人物が純血で中国文化を重んじる中国系トリニダード人だとは限らない、ということだ。

つまり当の中国系が、自身を「混血」のアイデンティティを持つと認識するか、「中国系」のアイデンティティを持つと認識するか、またそのどちらでもなく「トリニダード人」とあるとのアイデンティティを持つとするか、さらには「中国系トリニダード人」とするかは、育ってきた環境の様々な要因や、いつ・どこで・誰との関係性にお

いて自己をどのように認識するかによって左右される。要するに、中国系が、どのカテゴリーに他者が自身を区分すると認識するのか、もしくはどのカテゴリーに自身のアイデンティティを見出すのか、また何を自身のアイデンティティとして主張するのかは、トリニダードという多民族共生社会のアフリカ系やインド系などの非中国系との相関関係に依拠するものであり、時と状況によって揺れ動く。そのため中国系のアイデンティティは決して安定したものではない。

今後中国からトリニダードへの移住が続くことは確かである。同時に、トリニダードの中国系の混血も確実に進む。強い中国への愛着を持つ中国系同郷組織に所属する中国系 1 世の高齢化が進み、トリニダードの中国系における世代交代も進む。これからも中国系は、多民族が共生するトリニダードの社会の一員として、経済的・政治的に貢献し、そして文化的にトリニダードの多様性の一部を担い続けるであろう。そして中国系のアイデンティティはますます多様化し重層化していくであろう。

謝辞

貴重な語りを提供して下さったバルバドスとトリニダードの中国系の皆様に心からお礼を申し上げます。現地調査に快く協力して下さった Island Buddy Ltd. と野藤弓聖さんに感謝致します。

My sincere and deepest gratitude goes to the Chinese people in Trinidad. Your unrecorded stories are very informative to deepen our understanding how important the Chinese communities are in Trinidad.

付記

本研究は MEXT 科研費 JP17K02034 と大妻女子大学人間生活文化研究所戦略的個人研究費（課題番号：S3008）の助成を受けたものです。

引用文献

- [1] Central Statistical Office, Trinidad and Tobago. "Trinidad and Tobago 2011 Population and Housing Census: Demographic Report". 2011.
- [2] エドゥアール・グリッサン 『全一世界論』 恒川邦夫訳. みすず書房. 2000 年.
- [3] S. Albert and D. A. Whetten. "Organizational Identity". B. M. Staw and L. L. Cummings (eds.) *Research in Organizational Behavior*. JAI Press, Greenwich, 1985: pp. 263-295.
- [4] 豊田 義博 「組織アイデンティティは自我アイデンティティを高めるかーモチベーション誘因の体系化を通じた検証ー」 *Works Review*. 2008. 3: pp.46-59.
- 佐藤秀典 「組織アイデンティティ論の発生と発展 1ー「我々は何者であるか」を我々はどのように考えてきたのか?ー」 『組織学会大会論文集』. 2012. 1(2): pp.85-94.
- [5] 姜 紅祥・辻田 素子 「新華僑の組織間関係に関する国際比較研究：温州人と福建人等のソーシャル・キャピタルに着目して 日本における福建同郷組織が果たしてきた役割と直面する課題：京都、大阪、神戸福建同郷会に対するインタビュー調査に基づいて」 『社会科学研究年報』. 2014 (45): pp. 149-161.
- [6] Look-Lai, Walton.
----"Chinese Indentured Labor Migrations to the British West Indies in the Nineteenth Century". *Amerasia Journal*. 1989. 15(2): pp.117-4.
----"The People from Kwangtung". *Trinidad and Tobago Review*. 1993. 15(8): p.16.
----*The Chinese in the West Indies 1806-1995: A Documentary History*. University of the West Indies, Mona: The Press, 1998.
----"Chinese diasporas: An overview". *Caribbean Quarterly*. 2004. 50(2): pp.1-14.
----"The people from Guangdong". W. Look-Lai (ed.) *Essays on the Chinese diaspora in the Caribbean*. 2006. St. Augustine, Trinidad: pp. 1-10.
----"The Trinidad experience". W. Look-Lai (ed.) *Essays on the Chinese diaspora in the Caribbean*. 2006. St. Augustine, Trinidad: pp. 56-75.
----"The Chinese of Trinidad & Tobago: Mobility, Modernity and Assimilation During And After Colonialism". Tan Chee Beng (ed.). *Chinese Transnational Networks*, Routledge, 2007: pp.191-210.
- [7] Johnson, Kim. *Descendants of Dragon: The Chinese in Trinidad 1806-2006*. Kingston: Ian Randle, 2006.
- [8] Hong, Vivian. "Do Chinese Associations Facilitate Second-Generation Chinese-Trinidadians Integration into the Wider Society?". Masters Diss.

2017. Ryerson University.
- [9] 柴田佳子. Shibata, Yoshiko.
----“Hybridizing Jamaican Culture, Repositioning an Ethnic Minority: ‘Creolization, Ethnicity and Christianity among Jamaican Chinese’”. International Conference in Honour of Professor Barry Chevannes, The University of the West Indies, Mona, Jamaica. 2006.1.
- “Revisiting Chinese hybridity: negotiating categories and re-constructing ethnicity in contemporary Jamaica – a preliminary report”. *Caribbean Quarterly*. 2005. 51(1): pp. 53-75.
- “Changing identities of the Chinese in the Anglophone Caribbean: a focus on Jamaica”. *Routledge Handbook of the Chinese Diaspora*. 2013.
- “Revisiting Contemporary Significance of ‘Hakka’ among Jamaican Chinese: Multiplicity of Chinese Sense of Belonging and Diaspora Identity”. *Changing Hakka Cultures and Societies*. May, 2014. 中山大学 人類学部, 嘉应大学客家研究院.
- “The Chinese Jamaican ‘Necropolis Project’: Remembrance, Re-membering, Changing Diasporization in the Contact Zone”. *Contemporary Caribbean Visual Culture: Artistic Visions of Global Citizenship*. June. 2014. Department of Modern Languages, Birmingham University, UK.
- [10] 園田節子 Sonoda, Setsuko.
----「英領西インド諸島における中国移民の社会的地位向上: 1930-40年代の分析を中心に」. 「転換期中国における社会経済制度」共同研究 (班長: 村上衛), 京都大学人文科学研究所 2019年2月1日.
- “Achieving Economic Success and Emerging as Allied Nationals: A Historical Study of the Chinese in British Caribbean”. The 8th Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y de Oceanía, University of Macao, China. 2018年11月11日.
- 「カリブ海地域中国系コミュニティ空間の発展と変容: 「帝国」イギリスと中国国民党越境政治がつくる重層性 (1930~1960年代)」ラテンアメリカ学会 2018年度年次大会. 愛知県立大学長久手キャンパス 2018年6月3日.
- “History of Raising Self-Awareness and Historiography for Strengthening Connectedness: The Vancouver Chinese in Multicultural Canada”. Takako Yamada & Toko Fujimoto (eds.), *Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness*, Senri Ethnological Studies. 2016. 93: pp. 15-48.
- “Guangdong Regionality in the Early Qiaowu Affairs of Overseas Chinese”. 張応龍主編 《広東華僑与中外関係》 広州: 広東人民出版社. 2014: pp. 58-76.
- [11] 前掲[6] Look-Lai. 参照.
- [12] 前掲[7] Johnson. 参照.
- [13] Look-Lai は 192 人, Johnson は 194 人と主張が異なる. ここでは史料調査を専門的に行う Look-Lai の数値を採用した.
- [14] Hilary Beckles and Verene Shepherd (eds.) *Caribbean Slave Society and Economy: A Student Reader*. 1993. The New Press.
- [15] David Dabydeen and Brinsley Samaroo (eds.) *India in the Caribbean*. London: Hansib. 2006.
- [16] Ferreira, S. Jo-Anne. *The Portuguese of Trinidad and Tobago*. Kingston: The University of the West Indies Press. 2018.
- [17] 前掲[8] Hong. 参照.
- [18] “Major part of Charlotte Street to be designated ‘Chinatown’”. CNC3 Television. <https://www.cnc3.co.tt/press-release/major-part-charlotte-street-be-designated-chinatown> [accessed 2019-6-3]
- [19] “Part of Charlotte Street to be designated Chinatown”. *Trinidad and Tobago Guardian*. May 16. 2019. <http://www.guardian.co.tt/news/part-of-charlotte-street-to-be-designated-chinatown-6.2.847428.f4fccfe6f6> [accessed 2019-6-7]
- [20] 前掲[8] Hong. 参照.

Abstract

This paper preliminarily examines the question of identity of the descendants of Chinese immigrants in Trinidad, where a multi-ethnic symbiotic society exists. The Chinese started coming as indentured labourers from the beginning of the 19th century. By the turn of the new century, many of them gained success from becoming professionals in the Caribbean, East Asia and the Britain. Of note, one of them became a Foreign Minister for Sun Yat-sen's government. The inflow of the Chinese immigrants to Trinidad continues today, although on a smaller scale. Based on the stories shared by the Chinese Trinidadians in February 2019, the construction of their identity and the establishment of various Chinese Associations, as well as the interaction with other ethnic groups and the process of settlement in Trinidad are analysed. At present, Chinese individuals in Trinidad have various identities, and opt for one or some which is/are the most suitable depending on the circumstances. The other members of Trinidad's society, such as Africans and East Indians, as majorities, and the details of the Chinese family backgrounds, affect the identity construction of the Chinese Trinidadians. As a result, the identity of the Chinese Trinidadian is unstable and shifts from "the Chinese from China", "the Chinese", "Chinese Trinidadian" and "Trinidadian".

(受付日 : 2019 年 8 月 15 日, 受理日 : 2019 年 10 月 17 日)

伊藤 みちる (いとう みちる)

現職 : 大妻女子大学国際センター

専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会。